

# 「オーイ 親友よ！」

オーイ 親友よ！

ぼくはね、もう十才になった。

はじめて会った時、ぼくは六才で年長さん。なんと七十七才ちがいだっただね。

ぼくが目の前で焼いたお好み焼き、全部食べてくれたね。右手もうまく動かないのに。

こぼしちやカツコ悪いからって気にして、陽にやけていない白い指をぶるぶるさせながら

おはしをぎゅつとにぎりしめていたの、ぼく知ってたよ。

夫人が汚しちやいやだからっておひぎかけをしてくれたけど、

本当はそんなのいらないうつていいかったんだ。男だから。ぼくの前だし。わかるよ、今は。

あの日からぼく達は親友になった。

ぼくね、親友がパーキンソン病だつていうこと、内しよにしていた。はずかしいからじゃない。

あんなに大きいビルの最上階で、あんなに大きな机と黒いイスにすわつて、

二万人の人達のリーダーだつたんだよ。国と会社はちがうけど、総理大臣みたい。

だからずつとがんばつたんだ。カラカラでヘトヘトになつてもやり通したんだ。

それでとつ然たおれちゃつた。ぼくの方、ちらつと見てさびしそうに、

「最後に失敗したよ。」つていつていたけど。

オーイ、親友よ！ 失敗なんかじゃない！

病気じゃなかったら、ずつと世界中を飛び回つてぼくと親友になんかなれなかった。

そんなのつまらない。

七月三十一日、今年もお誕生日がくるね。

ぼく、もうプレゼント決めた。

三十一日の夜、すつごく大きいシャボン玉を作つて飛ばすんだ。天国の一番高いところへ届くようにね。

きつと見える。きつと届く。だからぼくの誕生日にもお返事をくれないかなあ。

「返事は必ず書く。」つていつていたよね。

十一月十二日の夜、白くてしつぽの長いきれいな流れ星一つ、流して下さい。

オーイ 親友よ！

会いたいよ、いま。いますぐ。

待つています、流れ星一つ。